

所沢の歴史グループワーク発表会 & 歴史勉強会

2019-4-2 記 小川雅愛

実施日 2019年3月28日(木) 13:30~16:30

会場 中央公民館 8・9号学習室

参加者 37名

◆発表会 所沢の歴史グループ「歩いて知った所沢の歴史」 発表者 11名

本年も所沢市民大学第25期所沢の歴史グループを修了された方2名に本サークルに入会いただいた。第16期の所沢市史発表会以後、すでに市民大学発表会で公開された内容ではあるが、新会員を窓口にし市史グループのご協力を得て毎年のように発表会を設定して実施してきた。

本会は7回目ぐらいになる。発表は制限時間を設けず、取り組みや研究の成果の発表を見てみたいことと、サークルとして新たな所沢市史修了の方々にパワーをいただき、学びたいというのがこの会の開催の目的の一つと感じている。

今回も25期所沢の歴史グループ修了から27期の企画委員の任につかれた方やほぼ発表会と同じオールメンバー、25期を担当された企画委員 都合11名の方々にご多忙にかかわらずお集まりいただき感謝のほかない。

今回の発表はすでに観光マップや町歩き散策マップ・ガイドが発行されている中で、市内を大きく3地区(7フィールド)に分け、その区域に存在する遺跡や古墳、歴史的建造物等を手分けして歩いて巡り、所沢の歴史を体感し、そのことを通じて再発見した所沢の魅力をオリジナルな散策マップとガイドを残すことを目標にした活動の成果で、何度、聞いても魅力のある発表であった。また、サークルとしては市内の歴史散策を柱としているので共感できる。すでに「学びの記録」に詳細はまとめられているので内容は省略する。



所沢の歴史グループ 発表者次々と

サークルでは今まで、集中的にこうした形で市内歴史散策はしてこなかったもので、意外と知らない史跡等もあり、今後の活動に採り入れてみたいと思うものもあった。

短期間のうちによくこれだけの成果をあげられたと思う。集団でのグループ活動の勢いを

まざまざと感じる 50 分でもあった。

今回は時間を十分取れなかったが、7つの各フィールドワークごとに質疑応答を設け、深めていくべきであったと反省している。今後ご協力いただいた所沢の歴史グループの皆さんとともに所沢市史の学びを続けられればと思う。

◆「自由民権運動と秩父事件」を追想する。

3月26日 明治大学名誉教授 渡辺隆喜先生の全6回集中講座「明治150年 維新期の所沢を学ぶ」の最終回が終了した。当サークルでは江戸・幕末からの近現代史を主体的な学びにしているので、データをフル活用しての講座は大変勉強になった。

第5回、6回の講義の眼目は「上からの改良路線」と「下からの革命路線」として明治時代初期から憲法発布までの歴史の流れの大局を理解するものであった。特にこのたびは第5回のタイトル「自由民権運動と秩父事件」について改めて考える機会をもった。

サークルでは平成26年12月「秩父事件の足跡」を巡るバスの旅を地元の専門ガイド氏の案内で実施している。その時、羊山公園の秩父事件の碑、下吉田棕神社、映画「草の乱」セットの井上伝蔵の住居、被害にあった小鹿野の通りに並ぶ高利貸しのあったあたりの家などを見学して歩いた記憶が甦る。

埼玉県の大きな歴史事件は幕末の武州世直し一揆と明治17年秩父事件の二つが重要である。歴史講座「武州世直し一揆」受講した後、日高の一揆の会と協調して学び、震源地の名栗を歩く活動を実施してきた。なお、秩父と名栗は距離的には近いが、関連はみられない。両地域とも養蚕が盛んでありそのことが事件と深く関わっているぐらいか。以上のことを踏まえ、秩父事件の根っこの部分となる自由民権運動などを考えながら比較してみたい。



幕末には百姓一揆が頻発したが、権力者（お上）へ反抗というより、豪商や豪農などの富めるものへの怨嗟が暴発したものが殆どで打ちこわしの道具や延旗などを持った姿が実態であった。したがって殺傷能力のある竹やりや刀剣・鉄砲を持つことはなかった。武州世直し一揆の壁画もそうした姿が描かれている。この部分が秩父事件の姿と大きな違いと思う。

秩父事件では軍隊的な組織と軍律を設け、下からの武装蜂起の革命路線=農民を主体とした主権在民の主張、自由と権利の請願活動であったと思う。軍律はなぜか筑波天狗党の西行の際に定めた軍律に酷似している。古くは織田信長の軍の綱紀とも共通している。いずれにしても厳しい軍律であった。西洋諸国は基本的人権は長い闘争のうえ獲得しているが、日本はそうした動きはなかったために権利意識に目覚めていないとの論を聞いたことがあるが果たしてそうなのだろうか。

自由民権運動というと昔の百円札に描かれた板垣退助が思い出される。明治期の埼玉県も自由党活動は波及してきたが南部の地域が穏健で、北部方面は急進的であり、県庁の所在地決定を巡ってもこれが大きく影響したという。昨年、栃木市バスの旅で明治初期栃木市にあった県庁が栃木を含む都賀地方の自由民権運動が盛んになったことを嫌った県令が宇都宮に移転させたことを思い出した。

秩父事件を起こした要因は松方デフレ⇒生糸養蚕業者を直撃⇒高利貸しに富の集中⇒自由民権運動（自由な言論・集会）の抑圧⇒元本を上回る高利貸しの暴利⇒戸長役場・郡役所（抑圧側）への反発⇒事件・武装蜂起（反政府運動）という構図であろうか。

幕末・明治初期の日本の輸出品の移ぎは耕地の少ない秩父地方などの養蚕による生糸輸出で、秩父地域も零細農家が生産高を高める改良などで大いに潤い、高利貸しから借金しても乗り切る景気の良さと体力を維持していた。しかし西南戦争で膨らんだ国家財政を緊縮にかじ取りしたのが松方財政であった。横浜での生糸買い取り価格が値下がりして、農家経営は成り立たなくて、借金が雪だるま式に増えたという。

こうした状況の所に自由民権運動、自由党の活動が波及して急進化した。秩父事件の前に自由民権運動は各地で事件を起こし、政府の弾圧を受け、秩父事件の直前に自由党は解散した。取り残される形となったこの地域の旧自由党員は秩父困民党に組織替えし、先鋭化していった。

戸長役場は県・郡の下部役場で、戸籍を管理する長ということで戸長と呼ばれ、小さな村は一つの戸長役場が複数担当した。ここも県・郡の出先機関として自由民権運動は抑圧する末端組織に相当した。運動の激しい地域には他の地域からそれなりの役人が赴任した。

戸長役場を末端とする地方行政は明治憲法制定前に、欧州の制度に倣って市町村の行政制度に代わっていった。秩父の北は下久保ダムを通り児玉や群馬に思ったよりも近い。また西は十石峠を越えればすぐ長野県佐久穂町に通じている。古来、交流は活発であったことは想定される。秩父事件は孤立した地域に起こった事件ではないことが分かる。

秩父は現在、年間観光客が県内 1 位の人気観光地となっている。台形の盆地には荒川の

河岸段丘が発達して、景観のよいところで、こうした事件があったことを感じることはない。秩父事件の後、自由党は再度結成された。歴史にイフはないというがもし自由党が継続していたら秩父事件は先鋭化することなく、また違った局面の展開をしたことも考えられる。政府はその後、地方自治に対し、少し温情のある配慮がなされるようになったのは秩父事件の弾圧・封じ込めが力によるあまりにも過酷であったことの反省であったという。

参考

講座「明治 150 年 維新期の所沢を学ぶ」

山川出版社 「埼玉県の歴史」

D V D 「草の乱」